

2020 年度 帰国隊員/青年支援プロジェクト 実施報告書

(協力活動)

提出日：2022 年 7 月 31 日

氏名：松尾雄大

プロジェクト名称：セネガルにおけるスポーツを
通じた障害者のエンパワメントと社会参加促進活動
及び予備的調査

実施国：セネガル共和国

実施期間：2022 年 2 月 3 日～2022 年 6 月 10 日

I 活動実施内容概要

「2020 年度 帰国隊員/青年支援プロジェクト」の助成を受けて、セネガルにおけるスポーツを通じた障害者のエンパワメントと社会参加促進活動及び予備的調査のため、主に A) スポーツ支援、B) 就労支援の試行、C) 国内向け啓発、の3つの分野で活動した。

A) スポーツ支援

セネガルにおけるパラスポーツの普及・団体強化支援、及びユニバーサルスポーツの支援を実施した。活動の目標として、(当事者が) ポジティブな感情を獲得すること。②自分がやろうとすることに対する自信を獲得すること。③語り合い、楽しみながら集える空間を、その場にいる皆でつくりあげること。④その経験そのものを共有し、人と人との信頼を広げていくこと、の4つを立てた。また、セネガル現地パートナーに対しセネガルの「障害」課題の聞き取りや、障害者のスポーツに関するアンケート調査を行い、障害者が抱える問題の把握に努めた。加えて、活動拠点のティエス市において、アクセシビリティ調査(ホテル、市街地、スポーツ施設)を本活動に共感してくださった神保康広氏(車いすバスケットボール元日本代表)と共に実施し、現地の障害者の社会参加を阻害する要因になるハード面の問題を当事者の視点から把握した。以下、スポーツ支援に関する諸活動を列記する。

A) スポーツ支援活動

- パラスポーツの普及と団体強化支援

- 1. 車いすバスケットボール

- (ア) 神保康広氏(元車いすバスケットボール日本代表)の招致。

- 渡航期間：2022年4月28日～2022年5月24日

- (イ) 神保氏と、ティエス市の車いすバスケットボールチームの練習参加。

- 障害当事者のロールモデルである神保氏との交流。

- (ウ) 神保氏と、車いすバスケットボールの競技用車椅子修理と修理工房調査。

- (エ) 神保氏と、肢体不自由者の通所施設である障害者センターにある車椅子保管倉庫の環境整備。

- (オ) 神保氏と、のティエス市内におけるアクセシビリティ調査・スポーツ施設調査・就労調査。

- (カ) ティエス市の車いすバスケットボールチームと障害者センターの肢体不自由者を対象とした、スポーツに係るアンケート調査。

- 2. ブラインドサッカー

- (ア) セネガル現地コーチ主導のブラインドサッカーの定期練習の整備。

- (イ) ティエス市のブラインドサッカーにおける環境調査。(施設・競技備品)

- (ウ) セネガル視覚障害者スポーツ協会設立。

- (エ) ブラインドサッカーボール修理の環境整備。

- (オ) ブラインドサッカートレーニング用マニュアル作成。

- (カ) ブラインドサッカーチーム、国立盲学校、インクルーシブ学校、視覚障害者当事者団体の視覚障害者を対象としたスポーツに係るアンケート調査。

- ユニバーサルスポーツの支援

- 1. ボッチャ

- (ア) 障害者センターにおけるボッチャの導入、開催。

- (イ) ティエス市内の職業訓練校で、健常者を対象としたボッチャの授業導入。

- (ウ) 障害者センターの肢体不自由者とボッチャボールの製作。

- (エ) ボッチャのルールブックを制作。

B) 就労支援の試行

スポーツ支援と並行し、セネガル国内で障害者が就労可能な仕事を把握することを目的に、セネガル産の革を使ったバッグづくりや飲食の販売に関連した試行的な活動を行なった。障害者が社会参加する際に、経済的な自立は重要な観点である。社会参加の手段として、スポーツと就労の2軸があることで、仕事と余暇の両面において、自分の役割や存在意義を実感し自己肯定感を高め、社会生活を通じて自立へつなげることができると考える。以下、就労支援の試行として実施した諸活動を列記する。

<就労支援活動>

- セネガル産の革製品づくり
 1. セネガル国内の革のなめし場視察。
 2. ティエス市内の village artisanal の職人と連携した革製品づくり。
- 飲食の販売
 1. 神保氏と、唐揚げ及びカレーパンの試作。
 2. 市民向けに試作品を配布（2回）。

C) 日本国内向け啓発活動

本活動期間中、神保康広氏、及び他の国際協力団体と共に、オンラインイベントを延べ3回にわたって実施した。3回を通して、障害当事者の目線から、セネガルの街中のバリアフリーや施設などのハード面や障害者に対する周囲の人の関わり方などのソフト面、パラスポーツの状況や携わる関係者や選手の状況を伝え、社会が作り出している「障害」を啓発した。

一般社団法人 Bokk Jambaar¹と一般社団法人 A-GOAL²とオンラインイベントを開催。

- 【現地から生中継】突撃アフリカシリーズ～第二弾～ 「車いすバスケットボール元日本代表選手の神保さんと行くセネガル」 出発準備編
- 【現地から生中継】突撃アフリカシリーズ～第3弾～ 「車いすバスケットボール元日本代表選手の神保さんと行くセネガル」 現地活動編
- 突撃アフリカシリーズ～第4弾～ 「車いすバスケットボール元日本代表選手の神保さんと行くセネガル」 帰国報告編

2 活動の結果・成果

本プロジェクト申請時に記した期待される成果ごとに、以下の通り活動の結果と成果をまとめた。なお、渡航中にスポーツ支援活動で実施した実績値は、下図1に示すとおりである。

① ベースライン調査により、セネガルの視覚障害者と肢体不自由者のスポーツへの参加状況を把握するとともに、障害者の社会参加の課題が把握できる。

セネガルの肢体不自由者（ティエス市の車いすバスケットボールチームと障害者センター）と視覚障害者（ブラインドサッカーチーム、国立盲学校、インクルーシブ学校、視覚障害者当事者団体）を対象としたスポーツに関するアンケート調査や、現地カウンターパートの Aly DIA 氏（ブラインドサッカー代表監督）や Khadim FALL 氏（ブラインドサッカーセネガル代表）、Abdoulaye Mbaye 氏（車いすバスケットボール選手）、その他障害者への聞き取り、そして市街地のアクセシビリティ調査を神保氏と行うことで、セネガルの障害者の社会参加を阻害する問題や課題を把握することができた。

¹ セネガルで活動した元 JICA 海外協力隊員が立ち上げた団体。日本とセネガルの架け橋になるべく、セネガル現地では女性支援と子供の教育分野を中心に活動を行う団体。

² アフリカ各地の地域スポーツクラブ（サッカー・ランニング・バレーボールなど）と連携し、緊急支援や SDGs 達成に向けた支援「ローカルスポーツハブ支援プロジェクト」を行う団体。

アンケート結果によると、セネガルの障害者が行うスポーツは、「散歩」「ランニング」「筋トレ」「陸上」「ゴールボール」「ブラインドサッカー」「車いすバスケットボール」などである。実施する理由としては、「体力向上」「競技力向上」「健康増進」などが多くを占めるが、「交友関係の拡大」など自身のコミュニティを広げるためにスポーツを手段として認識している回答もある。

一方で、スポーツへの参加の阻害要因として、「スポーツにかかるお金」「スポーツをする場所やチームがない」「スポーツをする時間がない」「一緒にできる友達がいない」「教えてくれるコーチがいない」「怪我や１人でやるのが怖い」「交通手段がない」などの回答があった。

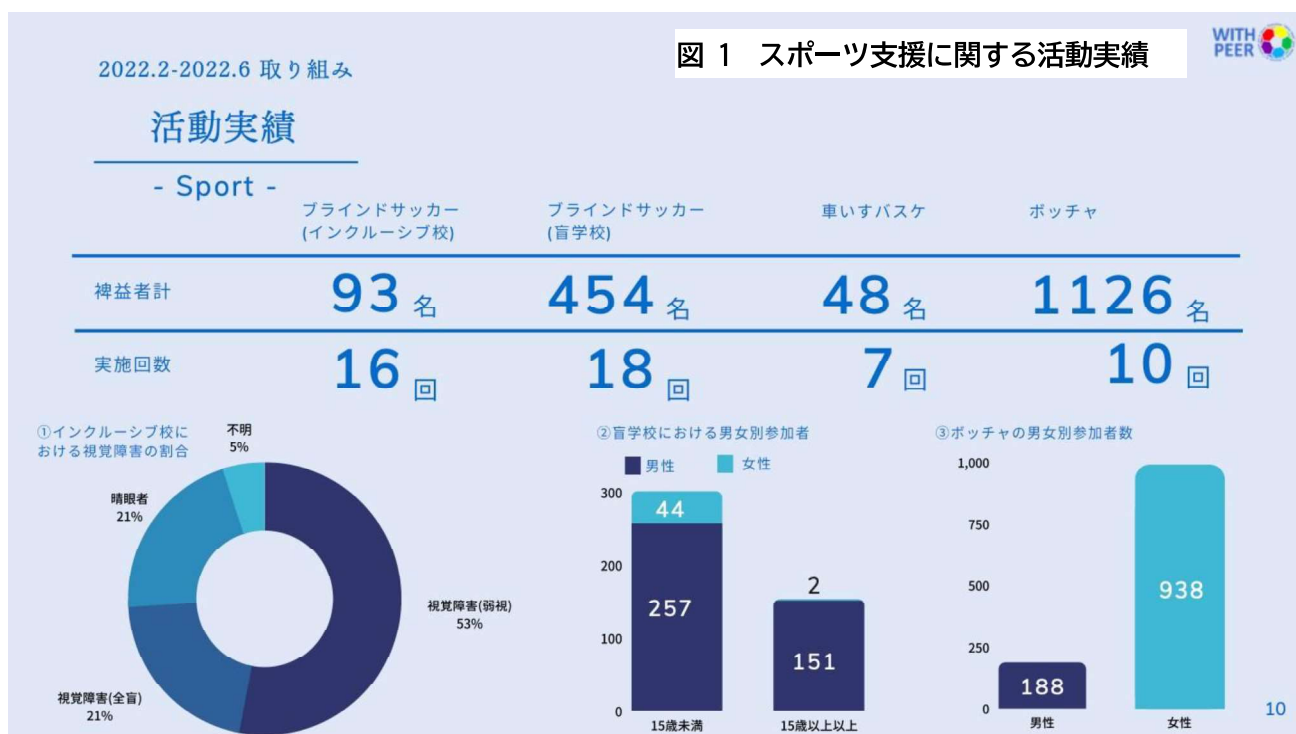
肢体不自由者の社会参加に対する熱意は高く、車いすバスケットボールチームには、事務や靴修理、携帯修理、義足装具士、電気／水道技師、車いす修理士など資格を持ちつつも、満足に仕事につけていない現状がある。とある選手は物乞いではなく、就労することの必要性を訴えている。しかし、障害者センターにて月収１万円以下で仕事をする人も多く、車いすバスケットボールの全国大会の決勝出場チームの選手や代表選手でも、街中で物乞いをしている選手もいる。物乞いをしている肢体不自由者に話を聞くと「学校教育にアクセスできず、政府からの支援もない。仕事に就きたくても資格もない。」と回答があった。競技を継続するには、障害者の社会的／経済的な自立が重要であり、選手たちの就労サポートも必要だと考えている。

車椅子は海外（アメリカ、中国、ドイツ、ベルギー、イスラエル etc.）から援助されたものが多い。中古でも購入に¥10,00～¥12,000 程度と、高額な傾向がある。大多数の人が、障害当事者団体からの車椅子の寄付や、障害者センターで入手することが多い。車椅子が壊れた際は、障害者センターで修理依頼をするか、街中の鉄工所で修理している。また、街中で見かける肢体不自由者は、ステッキや車椅子を使用して街に出てきており、その多くが小児麻痺（ポリオ）や事故が原因であった。街中のアクセシビリティは整備されておらず（未整備の砂道や段差、歩道の未確保など）、脊椎損傷者は家からできることができてないと神保氏は推測している。この部分に関しては今後の課題として、明らかにしていく予定である。

セネガルの視覚障害者の社会参加を阻んでいる障壁は、学校教育の機会、就労の機会、職業訓練の機会の乏しさ、貧困家庭など複雑に絡み合っている。学校には視覚障害児が学習を受ける環境が整っていないのに加えて、学校までのアクセスの問題がある。学校までの道のりを視覚障害の児童が１人で通うのは、セネガルの交通事情や道路事情を鑑みても困難である。

また視覚障害児が外出する際に、問題が生じる場合がある。例えば、スポーツや学校などに連れていくのは、親の責任として過大な負担になると考える保護者もいる。また、家族による過剰な世話などによって社会から隔絶されるケースもあることがわかった。セネガル唯一の国立盲学校では職業訓練課程があり、電話応対や機織りなどのカリキュラムがある。他方、実際には就労機会は少ない。学業優秀な視覚障害者は卒業後に渡仏して就労する視覚障害者もいる。

最後に、セネガルでは、出生時に¥100 程度のワクチンが接種できず、病気によって視覚障害を患う人が多いことが聞き取りによって判明した。



② セネガルの障害者のスポーツに対する意識が変容し、スポーツの場への参加頻度が増える。

本渡航中に変容が見られた肢体不自由者と視覚障害者の 2 名の事例について記載する。

Ⅰ 障害者センターに通う肢体不自由者 A 氏。

A 氏は、幼少期にポリオを患い肢体不自由になった 50 代男性である。以前は車いすバスケットボールの練習にも参加していたとのことだが、怪我をすることが怖くなり練習に参加することを断念していた。それからスポーツをする機会は一切なく、出会った当初は「スポーツはやっていない。怪我をするのが怖いから。」と話していた。

A 氏とスポーツをするために、障害の有無に関係なく参加することができる「ボッチャ」を提案した。セネガルには、ボッチャに類似した「ペタンク」というスポーツがあるが「ペタンクは健常者がやるもので、障害者がやるものではない」と A 氏は認識していた。障害者センターにいる彼の他に複数名の障害者に声をかけ、共に、ボッチャボールを製作し毎週 1 回は集まってボッチャを実施した。その後は、障害者センターにいる人たちで、障害の有無に関係なく一緒にボッチャを楽しむ機会を作っていた。

神保氏がセネガル滞在中、神保氏から A 氏にスポーツをしているか質問したところ、「ボッチャやっている。この後一緒にボッチャをしよう。障害者センターでボッチャのチームを作って、セネガルで大会を開催して出場したい。」と語ってくれたことから、スポーツに対する前向きな発言とスポーツに参加する場を創出できたと考える。

Ⅱ ブラインドサッカーの練習に参加する視覚障害者 B 氏。

B 氏は、生まれながらに視覚障害(全盲)の 20 代男性。彼は通常の学校に通えず、インクルーシブ学校の教育プログラムに参加するも、学習の遅れにより教育を享受するシステムから漏れた 1 人である。貧困家庭で生まれ、日中は家族のために物乞いをし、そのお金で家族と生活を送っている。

ブラインドサッカーの練習は私が渡航した時点では行われておらず、視覚障害者がスポーツに参加する機会はなかった。セネガルに唯一ある国立盲学校では体育や放課後にサッカーをレクリエーションとしてやっている子たちはいるが、ごく限られた人数でしかない。

B氏は、国立盲学校に在籍していなかったため、ブラインドサッカーに参加する機会はなかったが、私が週6回の定期練習を、現地パートナーのAly DIA氏とKhadim FALL氏と共に整えたことで、B氏も練習に参加ができるようになった。B氏は「これまでサッカーをやる場所がなかった。サッカーが好きだから、できることが嬉しい。」と語ってくれた。

出会った時は身体操作が苦手だったが、練習を重ねることで徐々に変化が見られている。B氏は、物乞いが中心の生活ながら週6回休まず練習に参加しており、自身のコミュニティを広げることができた。

③ セネガルの障害者スポーツの普及と競技力向上に係る課題を把握するとともに、今後の継続的な活動に向けた障害当事者間のネットワーク構築と活動拠点が整備される。

【成果を見とるための視点】

本活動の大前提として、私は「障害」とは機能障害（耳が聞こえない、目が見えないなど）を指すのではなく、そのことを理由にその人の尊厳、生活、生命を脅かす社会的障壁や人々の態度、そしてそこから生み出される偏見や差別だと捉えている（「障害」の社会モデル）。

また、アマルティア・センが提唱した「実質的に選択可能な生き方の幅（ケイパビリティ）」とスポーツの観点から、スポーツを通じて個人の能力強化だけでなく、環境と社会に働きかけていくことで、障害者一人一人の尊厳、生活、生命を守りつつ、他者との関わりを通して「自己実現（良き生）」を支えたと考えている。これらに基づき、スポーツごとに「個人」「社会」「環境」の観点から結果と成果をまとめた。

1. 車いすバスケットボール

● 「個人」

選手たちは車いすバスケットボールを楽しみ、生活の一部になっている。地方から来た障害者が車いすバスケットを通じて、当事者の友人を増やし、家族のような環境の中で楽しんでいる。週3回コートに通い、バスケットを楽しむ姿が見られる。一方で競技力は低く、向上心は低い。ポリオや下肢切断などで歩ける方が多いが脊椎損傷の人は見かけない。定期練習を休む選手もあり、個人向けに参加率を上げていくアプローチが必要である。

● 「環境」

車いすバスケットボールが可能な施設の不足、劣悪な環境にある。競技用車の不足により、コートに來ても車いすバスケットボールに参加できない選手がいる。競技用車いすは15年前のタイプのものしかなく、修理しながらやっているが、車いすの耐久性限界がきている。壊れた部品を新しく交換する部品がなく、寄付された車いすが多様なため、車いすの規定にあう部品が不足している。

コートの表面は車いすに負担をかけるアスファルトかコンクリートで、ひび割れなどがあり怪我の可能性が高い。練習コートへのアクセスは砂道で、移動に困難を極める。まずは競技備品の整備により、現状あるコミュニティを継続して巻き込める人数を増やしていくことが必要である。

● 「社会」

車いすバスケットボールに参加できるのは、一部の成人に限られている。バスケットコートは、健常者と共有であり、障害の有無によらずプレーを褒め、盛り上がる良さがある。そのため、自然と日本にはないインクルーシブな環境になっている。共有で使っているため、練習時間に制限があり、専用コートはない。チームメンバーはほぼ成人男性であり、女性や年少者のアクセスが課題(ティエスチーム：男性14名／女性1名が所属)。車いすバスケットボール専門のコーチはおらず、バスケットのコーチが兼任のため、競技力の向上に歯止めをかけている。全国大会が毎年1回開催されているが、中央競技団体の運営との関係性がよくなく、チームが出場をボイコットして開催できていない状況である。肢体不自由者がスポーツに関する情報にアクセスできるプラットフォームがなく、情報収集や発信できる情報のアクセシビリティの整備も課題である。

2. ブラインドサッカー

● 「個人」

視覚障害者の経済的自立が難しく、仕事とスポーツの両立が困難である。そもそも就労の機会が乏しく、国立盲学校では、電話受付、機織りなど職業訓練があるが、市場で物乞いをしている選手もいる。またセネガル唯一のティエスにある国立盲学校(INEFJA)は、多くのブラインドサッカー選手を輩出しているが、卒業後は、社会保障が整備され、仕事もあり大学にも通え、ブラインドサッカーも続けることができるフランスに渡仏する選手が多数いる。

身体操作の経験が少なく、身体活動そのものが苦手な児童も多い。体を動かすのが好きで、サッカーやダンスをする視覚障害児もいるが、一方でスポーツやレクリエーションに誘っても、怪我が怖く断る視覚障害者も多い。セネガルのブラインドサッカー競技人口は 60 人程度で、競技人口を増やすためにもスポーツ／レクリエーション、運動の楽しさを伝え、意識の変容をより促していく必要がある。

● 「環境」

国立盲学校はブラインドサッカーの全国大会(2015 年が最後)を開催する会場にもなっているが、校庭は整備が行き届いておらず危険がともなう。ガラス片、空き缶、トゲのある木の枝などがある中で、選手たちはボロボロの靴で競技をしている。フェンスなどの壁がなく、鉄の支柱と針金が剥き出し、また、雨季になるとコートが雑草に覆われる。

ブラインドサッカーは、国際基準では、人工芝/屋内の体育館で実施、コートの両サイドにはフェンスを設置することになっているが、どちらも欠如している。ボールは転がると音の鳴る専用のボールを使用するが、セネガル国内では調達が困難なため、各地のチームがブラインドサッカーを実施できていない。

● 「社会」

セネガルで視覚障害者が参加できるスポーツはブラインドサッカー、ゴールボール、陸上とあるが機会が乏しい。全国に 2015 年に育成されたブラインドサッカーのコーチは約 10 名いるが、セネガルパラリンピック委員会からの予算支給がなく、継続した講習会は実施されていない。また、全国に 5 チームほどあるが、セネガルパラリンピック委員会に正式に登録されたチームはなく、全国大会の開催や代表活動もストップしている。また、視覚障害者がスポーツをすることに対して、家族の理解が不足しているケースがある。セネガルパラリンピック委員会公認の視覚障害者パラスポーツ協会が4月に発足したが、設立したばかりで組織が脆弱且つ 1 名の熱心な方への負担が大きい。

3. ボッチャ

● 「個人」

障害者センターに通う人々は今回の活動を通じ、初めてボッチャを知った。すぐにルールを理解し、それぞれ役割を決めながら楽しんでいる。また、施設でチームを作ったり、大会を開いたりしたいなどの意欲なども向上している。これまで運動をしていなかった肢体不自由の方に、スポーツをしているか神保氏が質問をしたところ、ボッチャと答える当事者の方もおり、これまで運動の機会が乏しかった方の身体活動の機会も増加している。

● 「環境」

ペタンクという類似の競技があるが、鉄製の球は非常に高額。またボッチャボールはセネガル国内にはなく、子ども用のペタンクボールを当初は利用していたが、転がりすぎるという欠点あり。

正規品のボッチャボールは¥25,000ほどするため購入することは困難である。体育館など身近なスポーツ施設がないため、ヒビの入ったコンクリートの空間や砂の多い環境でやるしかない状況である。競技として実施は困難な環境ではあるが、レクリエーションとして実施する分には、ボッチャはセネガルの地でも普及していくことは環境的には可能である。

図2 パラスポーツの関係図

3 (申請時に) 期待された効果と実際の相違点異なる場合はその原因と対処内容、及びその対応による

結果

車いすバスケットボールの競技力向上に関する内容を期待された効果に盛り込んでいたが、より普及に重きを置いて活動を実施した。具体的な変更内容としては、肢体不自由の障害当事者である神保康広氏（元車いすバスケットボール日本代表）の渡航の目的に競技力向上を掲げており、活動内容に①競技力向上のための課題やデータを収集し、現地指導者とともに、競技力向上のための練習計画の策定。②練習計画の実施、評価、改善を、現地指導者や選手からのフィードバックをもとに、パラアスリートと行う。と計画していた。

しかし、神保氏との現地での活動を通じて、「目的：障害者の自立に向けた当事者視点での現地調査に加え、パラスポーツの普及を行う。」「目標：①身体障害者の社会的／経済的な課題や現状を調査し、今後の活動方針が明確になる。②(競技用)車いすの整備・修理・製造環境の具体的な課題と今後の改善策が明確になる。③整備・修理・製造に関する職人の技術的課題と改善策が明確になる。④車いすバスケットボールの普及に関する現地の取り組みについて当事者同士の対話を通じて明確になる。」と変更した。

変更に至った要因は、現地で神保氏にセネガルでの車いすバスケットボールや障害当事者の様子などを視察する中で、競技者の競技力の低さと向上心の欠如などを垣間見たこと、そして、バスケットボールコートは、健常者と共有であり、障害の有無によらずプレーを褒め、盛り上がる良さがあがり、自然と日本にはないインクルーシブな環境になっていることを目の当たりにしたからである。

チームの競技力を向上するために練習にコーチとして参加して練習の改善などを行うのではなく、一緒に練習に参加して車いすバスケットボールを楽しむこと、そして関係性を構築した上で当事者の抱える課題や困り感など対話を通じて把握することに努めた。また現状あるコミュニティをより充実したものにするため、破損した車椅子の修理を行い十分にプレーできるよう環境整備を選手たちと共に行った。

その結果、選手たちは限られた練習時間の最初に毎回行っていた車椅子の修理を行わずにすぐに練習ができ、壊れた車椅子を修理したことでコートに来て車椅子が足りず、交代で待っていた選手も一緒に参加することができるようになった。彼らの修理した車椅子に乗って嬉しそうに笑みをこぼしながら、我々に感謝を伝えられた時の表業が忘れられなく印象に残っている。このような車いすバスケットボールを通じたインクルーシブな環境をセネガルで広げていくことが、競技力向上よりも現時点でのセネガルには重要な観点だと障害当事者の神保氏より気付かされた。

4 活動成果の持続発展性

持続発展性の最も大きな要因は、セネガルにおける現地のパートナーの存在である。以下に記載するセネガル人が、現地パートナーである。現地で活動する上で、パートナーやステークホルダーが主役となって計画を進めることができるのか、問題や課題、活動系活を共有しどうやって解決していくのかを協議しながら活動している。例えば、ブラインドサッカーにおいては、週 6 回の練習を視覚障害当事者である Khadim FALL 氏をメインのコーチに据え、私はサポートに徹して活動をしていた。また Aly DIA 氏とは、ブラインドサッカーの練習マニュアルを作成し、他の地域のコーチが練習をする際の参考になるようにした。2015 年振りのブラインドサッカーの全国大会を開催するために、Aly 氏と協議し国立盲学校での環境整備やセネガル視覚障害者スポーツ協会での開催準備などを検討している。またセネガル国内で競技備品の環境整備を行うため、ブラインドサッカーボールの修理を現地工房と連携、ボッチャボールを障害者センターの肢体不自由者と共同し現地で調達可能な材料で製造、車椅子の修理できる人材の育成に向けた職業訓練校との連携提案などを行っている。

本プロジェクトを実行して最も大きな財産は、セネガルの「障害」課題に対して、そしてパラスポーツの現状に対して熱意を持って取り組むセネガル人パートナーと出会うことができたことである。

今後も共通理解の目的達成のため、活動計画や課題、成果をセネガル現地パートナーと共有、相談しながら進めていくことで、持続的に活動を進めていくことができる。

【セネガル現地パートナー】

- Aly DIA 氏（ブラインドサッカーセネガル代表監督、視覚障害児向けインクルーシブ教育プログラムコーディネーター、セネガル視覚障害者スポーツ協会事務局長、ティエス市障害者スポーツ協会会長）
- Khadim FALL 氏（ブラインドサッカーセネガル代表選手（キャプテン））
- Mamadou Lamine DIAKHATE 氏（ティエス市障害者スポーツテクニカルディレクター、職業訓練校体育教師、JICA 課題別研修生）
- Abdoulaye MBAYE 氏（車いすバスケットボール セネガル代表選手）
- Malick THIAM 氏（革製品職人）

5 苦勞した点、反省点、本活動を通じて得られたこと、学んだこと、教訓等

現地パートナーA 氏との関係性の築き方、そして協働することに苦勞をした。ボッチャを実施する際に、計画を共に立案しスケジュールを引いてやるも A 氏があまり実行することができず、それを補うように私が行くと、一緒にやるのではなかったのか。と A 氏より指摘をいただいた。遅れた計画を達成するために個人で進めるあまり、セネガル現地の文化や進め方を蔑ろにしていたと気付かされた。やってみることで、行動することは非常に大事ではあるが、現地の文化を尊重し一緒に進めていくことの重要性を改めて学んだ機会となった。

それ以降も A 氏と計画が進まないことも多少あったが、A 氏の周りを巻き込む力を存分に発揮し実行していく部分はプロジェクトを進める上で必要不可欠な力であった。早く進めるのであれば一人でも良いが、たとえ歩みが遅かったとしても大きな目的を達成するためには、現地と一緒に実行していくことが重要であると学んだ。

6 ご自身の今後のプラン、及び本活動の活用予定・計画

2022 年年内中にセネガルへの再渡航を予定しており、以下の活動を計画している。

私は、スポーツが障害の有無によらず人と人との信頼を繋ぐという確信を持っている。今後もセネガルでスポーツを通じて「障害」なき世界の実現し、誰もが生きがいをもてる社会、そして多様なコミュニティを作っていけるように活動を続けていく。

【次回の渡航】

- 車いすバスケットボール
 - ・ 未成年者、女性のアクセス向上を目的に、関係者による参加型ワークショップを実施。
 - ・ 日本関係者を繋ぎ、車いすや備品の寄付を通じ誰もが親しむことができる環境を整備。
 - ・ 当事者の整備技術を高めるための講習と、職業訓練校と連携した修理体制の整備。
 - ・ 雇用機会創出のソーシャルビジネス（革製品、布製品、）を試行。
- ブラインドサッカー
 - ・ ブラインドサッカーの全国大会の開催。
 - ・ インクルーシブ校、盲学校での定期練習の継続とコーチの育成。
 - ・ 中央競技団体の組織基盤の強化として、指導書ガイドの作成とそれをもとにしたワークショップ開催。コーチ資格の整備。
 - ・ コート、フェンスなど安心してプレーできる環境設備。
 - ・ 視覚障害者の収入向上のための雇用機会の創出。
- ボッチャ
 - ・ 性別、障害の有無に関わらないユニバーサルスポーツ体験会の開催。
 - ・ ボッチャの講習会開催。
 - ・ ボッチャ普及のため、ボール作成ガイドの作成、作成ワークショップ、指導員育成ワークシ

ヨッブ等の開催。

- 障害当事者の指導員による学校巡回
- 障害平等研修の実施
- 障害平等研修のファシリテーター育成

【2026 年に向けて】

- パラスポーツ、ユニバーサルスポーツ大会の定期開催。
- セネガル国内におけるパラスポーツ、ユニバーサルスポーツの認知度向上を目指し、SNS やメディアを通じた取り組みの発信。
- 障害者の雇用機会の創出。
- 障害者センターの職業訓練機能の整備
- 共生コミュニティの核となるユニバーサルスポーツ広場を作る。
- ユースオリンピックにおける日本選手団とパラスポーツ選手の交流。

以上